

海外学生派遣事業実績報告書

所属：総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻

氏名：浅見恵理

海外派遣先国名：ペルー共和国

海外派遣先大学名：国立フェデリコ・ビジャリアル大学

海外派遣期間：2009年7月14日～2009年11月30日

海外派遣先大学について

国立フェデリコ・ビジャリアル大学は、ペルー共和国の首都リマに所在する。創設は1963年で、大学名は諸科学や教育の研究に専念したペルー人研究者に由来している。本大学は18学部62専攻科を持ち、その中の一つである人類学部に考古学、人類学、歴史学、言語学、哲学の専攻科がある。また、大学付属の人類学考古学博物館は1986年に創設され、1989年にはペルー文化庁の文化科学機関に承認されている。現在は、大学の付属機関であるフェデリコ・ビジャリアル文化センターに属している。所蔵品は約2万点に上り、多様な文化の土器や石器を保存し、その一部を展示している。

海外派遣前の準備

博士論文を作成するためにはペルー共和国で発掘調査を実施し、実証的な考古学データを収集する必要がある。そのためには現地のペルー人考古学者の協力が不可欠であり、特に私がこれまで研究対象としてきたチャンカイ谷で発掘調査を実施した国立フェデリコ・ビジャリアル大学の教員や学生と情報交換を行ってきた。そして、自分の発掘調査プロジェクトを8月に実施する計画を立て、以前から親交のあった同大学のミゲル・パソス教授に相談し、大学への受け入れと協力を依頼した。その後、教授や共同研究者またペルー人の友人と電子メールで連絡を取り、現地情報の入手と発掘調査の準備に努めた。特に派遣前の準備として、ペルー人の共同調査者と十分な調整を行いながらペルー文化庁へ提出する発掘調査申請書を作成して提出し、ペルー到着後にはすぐに調査を開始できるようにした。

専門分野や語学の準備としては、総研大入学前からペルー共和国で別の遺跡の発掘調査へ参加したり土器資料調査を実施したりして、海外における考古学調査の経験を蓄積した。また、入学後は自分の考古学プロジェクトを立ち上げて測量調査を実施したことで、考古学調査を指揮するプロセスを習得し、また現地のペルー人考古学者との信頼関係を築いた。それらの経験を踏まえて、本格的な発掘調査を実施する準備を進めた。

海外派遣中の勉学・研究

ペルー文化庁へ提出した発掘調査申請書の許可が降りるまで約2ヶ月を要した。その間はワラル市長やクーヨ村長を訪問し、地元住民と話し合いをしながら発掘調査への協力と理解を求める等の活動を行った。また、発掘機材の購入、調査中の滞在場所や発掘作業員の確保に努めた。それらの作業と並行してクーヨ遺跡の踏査を行い、地表面で観察できる建築物の特徴や土器を調査した。広範囲に踏査を実施したことで、今まで未知だった場所にも遺構が広がるのが新たに判明した。

発掘調査許可が降りた後は遺跡の近くのサウメ村に居を構え、ペルー人の調査協力者と寝食をともにした。最初はテントと寝袋での生活だったが、次第に近隣住民の理解が得られ、部屋を借りることができたのは幸運だった。発掘調査は9月中旬から11月中旬までの2ヶ月間行い、基壇2つと住居址を対象に調査した。毎日の時間割としては、朝7時半に私たちが滞在していた家に作業員が集合し、点呼した後に全員で遺跡まで約20分歩く。8時作業開始で12時から13時まで休憩、16時に作業を終了した。終了後は家で出土遺物の登録

作業を行い、作業日誌を書くというのが日課であった。発掘作業、遺物登録や作業日誌に関しては各国で少しずつ方法が異なるため、ほぼ毎日仲間と作業の進め方、使用する用語等に関して議論したことはとても有意義であった。

また、調査中には村の関係者の間で、村興しとして遺跡を観光産業につなげようとする動きがあり、何度か協力の打診を受けた。ところが、まだ発掘調査を始めたばかりで考古学情報が不十分であり、遺跡が集客力を持つ状況ではないため、将来的な可能性だけを示唆するに留めた。遺跡の観光資源化は、今後も念頭に置かなければならない大きな課題である。



クーヨ遺跡遠景



発掘調査風景



発掘調査に参加した仲間と作業員たち

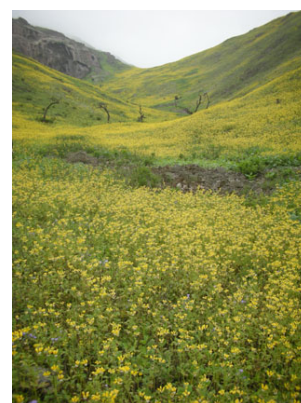


発掘調査期間中に宿泊した部屋

海外派遣中に行った勉強・研究以外の活動

ローマス・デ・ラチャイという自然公園の中にあるテアティーノ遺跡を訪問した。ペルーの海岸地域は乾燥した砂漠気候であるが、地域によっては7月から9月にかけて霧が降り、地中に埋もれていた植物が芽吹くローマスという現象が起こる。公園で見た谷一帯に広がる緑と黄色の草原は壮観だった。さらに、テアティーノ遺跡の石造建築物以外に、念願の地上約30mの所に描かれた岩絵を見ることができた。

また、発掘調査を開始する前の滞在先が日系二世のお宅だったので、ペルー在住の日系人社会の生活を体験することができた。例えば、桜のお花見やお盆の催行、日系一世の共同墓地サン・ニ



ローマス・デ・ラチャイ

コラスへのお墓参り等、日系人が集まる行事にいくつか参加させてもらった。また、ワラル市では 10 月と 11 月の週末はお祭りが多く開催されるため、週末だけサウメ村から出てきて友人と楽しく見学した。特に、小・中学生が装飾を施した車両とともに街中を踊りながら練り歩くお祭りや、町の一番大きな道路の路面上に花びらを使って絵が描かれるお祭りが、印象深く残っている。



サン・ニコラス日本人墓地



道路に花びらで絵を描く

海外派遣費用について

日本からペルーへの渡航費は、季節により変動するとはいえ高額であるのは変わらないため、派遣費用の大部分を占める。生活費に関しては、ペルーの物価は日本の約 1/3 程度なので、宿泊費や食費は贅沢をしないで低く抑えることができた。けれども、発掘調査で滞在していた村はインフラ整備が遅れており、電気が引かれていない。ほとんどの家で夜はロウソクを用いており、僅かに自家用発電機を所有している家がある。夜でも作業が必須だった私たちにとって発電機は必需品であり、発電機に使用するガソリンが思いのほか生活費を圧迫した。その他、発掘調査に必要な経費は、笹川科学研究助成から支給された助成金を用いた。

海外派遣先での語学状況

ペルーの公用語はスペイン語であり、私の調査地でもスペイン語が話される。今までペルーで調査を行ってきたこともあり、日常生活は問題なく過ごすことができた。しかし、発掘調査に付随して生じる行政的な手続きや現代的な問題に関しては、理解が困難な場面に直面することもあり、何度かペルー人共同調査者に助けてもらった。公的機関や公文書に特有のスペイン語表現等に慣れる必要がある。

また近年、ワラル市は山間部からの人口流入が激しく、先住民言語であるケチュア語を話す人がみられる。ペルー人考古学者との会話でもしばしばケチュア語の話題が上るため、スペイン語能力の向上だけでなくケチュア語の基本単語を習得する必要性を感じた。

海外派遣先で困ったこと

今回は発掘調査を実施するため、日本から比較的高価な調査機材を持っていった。そのため、安全な保管場所の確保が必須であり、調査期間中も保管には注意を要した。健康面に関しては、水道設備がないため川から取水した用水路で水浴びをしたり飲用したりしていたので少し心配したが、全く体調を崩すことはなかった。ただ気候が一定せず、気温が 30 度近くまで上がったり、逆に霧が一日中立ち込めて寒々とした日が続いたりして、体調管理にかなり気を配らなければならなかった。また、クーヨ遺跡は午後になると強風が吹くため作業中は全員マスクを着用していたが、ワラル市の薬局ではあまりマスクが販売されておらず、毎週末、全員分のマスクを調達するのに苦労した。

海外派遣を希望する後輩へアドバイス

海外派遣を希望する際、受け入れ先の選定と承諾書の入手に時間がかかる。また、派遣

先で宿泊所を確保するのに時間がかかるなど、派遣期間がそれほど長くないものの雑務に貴重な時間をとられ、本来の研究の遂行に支障をきたす可能性が高い。そのため、普段から海外の研究者との交流を積極的にもち、広く情報収集を行うことが重要だと思う。

また派遣先では、研究者とは言うまでもないが、できるだけ現地の人ともコミュニケーションを取ることが大切であると感じた。研究成果だけでなく、多くの収穫を得ることができるからである。例えば私の場合、発掘調査に参加した作業員や地元住民はほとんど考古学の知識がなかったが、作業中や休憩時間に根気よく説明していたら、以前よりも自分たちの国の歴史に興味を持つようになった。すなわち、私の調査が自国の歴史遺産に対するペル一人の意識向上に少しでも貢献できたのである。それは、研究者としてこの上ない喜びである。